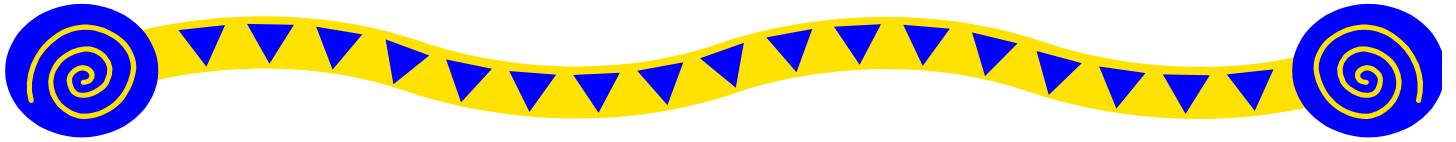


FIWC九州 2006春 中国下見キャンプ 報告書

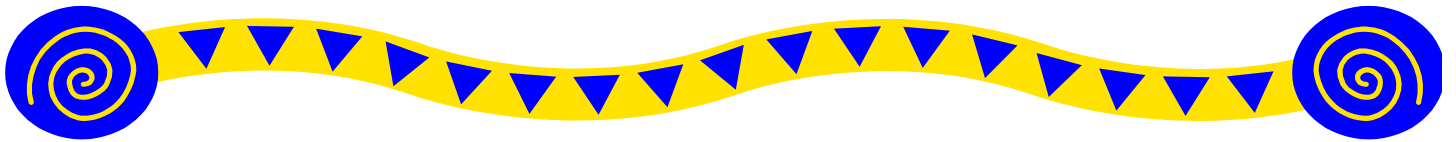
期日 : 2006年2月25日(土) ~ 2006年3月26日(日)





< 目次 >

1 . 参加者名簿（滞在期間・訪問場所）	p .
2		
2 . 簡易全体スケジュール	p .
3		
3 . トゥーグアン、リンハウ村訪問	p .
4		
4 . 平山（ピンシャン）村再訪	p .
7		
5 . 甲坪（ジャーピン）村下見	p .
8		
6 . 会計報告	p .
9		



1. 参加者名簿（滞在期間・訪問場所）

《近藤 好恵（よっぴ）》

九州大学医学部看護学科 3年
滞在期間：3月7日（火）～3月26日（日）
訪問場所：ピンシャン（平山）村、ジャーピン（甲坪）村、
（チベット）

《渡辺 恵利（えり）》

九州大学医学部看護学科 1年
滞在期間：2月25日（火）～3月26日（日）
訪問場所：トゥーグアン村、リンハウ村、ピンシャン（平山）村、
ジャーピン（甲坪）村、（チベット）

《横矢 碧希（あおき）》

中村学園大学児童福祉科 2年
滞在期間：3月7日（火）～3月26日（日）
訪問場所：ピンシャン（平山）村、ジャーピン（甲坪）村、
（チベット）

《佐々木 善信（ゾゾ）》

九州大学機械航空工学科 3年
滞在期間：3月7日（火）～3月26日（日）
訪問場所：ピンシャン（平山）村、ジャーピン（甲坪）村

《白根 大輔（だいすけ）》

タイランの大学時代の友人で、現在滞在中のドイツから応援にきてくれたキャンパー。次回の夏のキャンプにドイツチームのリーダーとして参加してくれることになった。

《原田 僚太郎（タイラン）》

2002年から中国のハンセン病問題に関わり始め、FIWC 関東の第1回中国ワークキャンプ立ち上げに関わる。早稲田大学卒業後、FIWC 関東の中国駐在員として、2003年からハンセン病快復村に住み込み、ハンセン病快復村を支援する国際的ネットワークの構築に取り組む。2004年には、日中韓の大学生を巻き込み、NGO「家JIA」を立ち上げ、代表を務める。ハンセン病を通じた人と人がツナガリを目指して活動を続ける。



《小牧 義美（あんちゃん）》

かつてハンセン病を患ったことがあり、目もよく見えず、手も足もうまく動かないという。原田僚太郎氏と出会い、中国の快復村を訪れたことから、ワークキャンプに関わるようになる。75歳の高齢ながら非常に活動的で、医療ケアに関する豊富な知識と体験に加え、日中の学生の精神的支柱として、キャンプを支えてくれた。

《その他、中国側メンバー》

桂林医学院の学生（ロンフォイ、ダーフォン ほか）、夏のキャンプに参加していた学生達など、たくさんの方が今回の下見キャンプに協力してくれました。

2. 簡易全体スケジュール

期日	活動内容	参加者
2月25日（火） ～ 3月6日（月）	《トゥーグアン村、リンハウ村訪問》 先発隊として、先にえりが出発。タイラン、あんちゃん、だ いすけと行動を共にし、トゥーグアン村、リンハウ村を訪問 しました。	えり、だいすけ、タイラン、 あんちゃん、他
3月7日（火） ～ 3月10日（金）	《ピンシャン（平山）村訪問》 7日の夕方に中国に到着（よっぴ、あおき、ゾゾ）。その後 バスを乗り継ぎ、山を歩いて、8日の夕方に ピンシャン村到着。10日の早朝には村を出発しました。	よっぴ、えり、あおき、ゾゾ、 ロンフォイ
3月11日（金） ～ 3月12日（土）	《ジャーピン（甲坪）村下見》 バス・汽車・車などを乗り継いで、11日の昼前にジャーピ ン村到着。翌日12日の朝に村をでました。	よっぴ、えり、あおき、ゾゾ、 だいすけ、タイラン、あんち ゃん、ロンフォイ、ダーフォ ン
3月13日（日）	《学生キャンプミーティング》 夕方から行われた、次回夏キャンプに向けての日中ミーティ ングに参加。タイラン、だいすけ、ゾゾはこの後桂林に出発。	よっぴ、えり、あおき、ゾゾ、 だいすけ、タイラン、あんち ゃん、ロンフォイ、ダーフォ ン、他
3月14日（月） ～ 3月26日（日）	よっぴ、えり、あおきの三人で、成都にむけて出発し、チベ ットに向かいました。そしてその後広州に戻り、26日に帰 国しました。	よっぴ、えり、あおき



3. トゥーグアン、リンハウ村訪問

～あこがれのトゥーグアン、リンハウへ～

今回、ほかのメンバーよりも10日ほど先に中国の地を踏んだ。二度目の中国。タイラン（原田僚太郎）は相変わらずの笑顔と抱擁で末っ子えりを出迎えてくれた。タイランの大「心」友であり、次回共にジャーピン村でのキャンプを創っていくことになった、だいすけも空港に迎えにきてくれていた。そもそも、なぜ私が一足早く中国を訪れたかという、それはピンシャン村以外の村をこの目で見てみたいから、という理由からである。昨年夏、私たちは桂林のピンシャン村でワークキャンプを行い、本当に素敵な思い出を仲間と共有したと同時に、中国のハンセン病快復村の現状を目の当たりにした。現在中国には600以上の快復村があると聞く。ピンシャンはその中のひとつに過ぎない。もっとたくさんの村を訪れて、村人やその村に関わる世界中のキャンパーたちと出会いたい。そしてそれぞれの村に存在する問題に触れ、考えることで、これからのキャンプづくりに生かしたい。このような想いが、トゥーグアン村とリンハウ村に出会わせてくれた。

トゥーグアン村（広東省呉川市）もリンハウ村（広東省潮州市）も以前からずっと行きたかった村だった。リンハウは言うまでもない、タイランが一年半住み込んだ村。そして、慶応大学の看護医療学部生を中心とした団体「PEACE」が、これまでワークキャンプを行ってきた村がトゥーグアンだ。



～トゥーグアンへ～

広州に着いた翌日、バスを乗り継いでトゥーグアン村に向かった。比較的隔離度は低いと思われる場所にトゥーグアン村はあった。村を散歩してみる。ユーカリの木ばかり生える赤土の丘を登っていくと、そこは見晴らしがよく、

村の周りにはため池が多くあるのが見えた。この村ではすでに5回のワークキャンプ、数え切れないほどのミニキャンプが行われており、トイレやシャワールーム、新しい建物もあった。また、ピンシャンと大きく違うところは、村に第二世代がいることである。学校に行っていないアピンは、私と数歳しか変わらないのに毎日せつせと家の仕事をやる。どこから集まってきたのか、昼間にはもっと幼い無邪気な子供たちが遊びにきていた。近くの町から野菜や魚をバイクで売りに来るおじさんもいた。いつも村人が集まる集会所には、テレビやいす、机があり、それらには「呉川市民生局寄贈」と書いてあった。この村には人の流れがある、そう思った。

そんな村に住む村人たちはとにかくテンションが高い。村に着いてまだ間もないというのに、私たちはいつの間にか互いにちょっかいを出しあい、ふざけ合う仲にまでなっていた。春休みの約二ヶ月間、この村に住み込んでいる慶応大学の学生も、異様に人懐っこいこの村人たちに惚れたのであろうか。しかし、決して安定しているとはいえない貧しい生活、生活環境、過去、そして現在彼らが抱えているであろう問題・・・それらを全く表に出さず、突然の訪問者とはしゃいでくれる村人たちを前にして、私はなんだか複雑な気持ちだった。もちろん嬉しさも隠し切らず、酒と落花生を片手に夜中まで村人と盛り上がっていたのは言うまでもないが。

トゥーグアンには一泊しかなかったが、村人と別れる時はやはり悲しかった。村の裏にある丘にひっそりと並んだ質素なお墓と、一番陽気だったおじいちゃんの熱のない冷たい義足が今でも頭をふっとよぎることがある。その度に、人懐っこく底抜けに明るいあの村人たちにもう一度会いに行きたいと強く思う。

～リンホウへ～



『何も見えない。リンホウに到るトンネルの中は電灯がなく、暗い。時々、トンネル内の壁にぶつかる。時々、自分の存在が闇に溶け込み、消えてしまった気がする。それでも、前方には光り輝く出口が見えている。前に進めば、この闇を抜けられる。』

夜明けと同時にリンホウに着いた。例のトンネルを目の前にしたときは言葉が無かった。これがあのトンネル。過去のハンセン病隔離時代を物語る真っ暗な、長い長いトンネルだった。トンネルを抜けしばらく進むと、朝日がリンホウ村をオレンジ色に照らしていた。ここが、ずっとずっと訪れてみたいと願ってやまなかった村、リンホウ村なんだ。そう実感したとき、胸がいっぱいになった。



現在村人は10人。建物は広大な敷地に点在するが、村人のほとんどは新しくつくられたコの字型の建物に向かい合って暮らしている。コの字集落から少し離れた家にひとり住む繁餘おじいちゃんは、手をふるふる震えさせながら酒を呑むアル中。着いたばかりの私たちを家に呼びいれ、とりあえず乾杯をしたがる。なにか作ってくれようとするおじいちゃんに、朝ごはんを済ませてきたことを伝えると、「打死!!!」(ぶっころすぞ!!!)と、怒鳴られた。私が席を立ち、帰ろうとするとまた「打死!」。最後には使用済みのティッシュまでぶん投げてくる始末。なかなかかわいいおじいちゃんだ。翌日、別の村に住む繁餘おじいちゃんの弟が彼の元にやってきた。私が、三人(おじいちゃん、弟、私)で写真を撮ろうとしたとき、弟が少し嫌な顔をした。ハンセン病を患

った兄と写真など撮りたくないと言っているようだった。ハンセン病。一体何なのだろう。

村長とはよく筆談をした。左足一本と松葉杖で体を支えて歩く村長が書く、「医生説、無可能治好、79年断肢至今。」 神経痛もあり、時々痛んで夜も眠れないという。「我心情十分痛苦。」 村を背負う村長は、体の痛みだけでなく心痛もわずらっているようだった。それにしても、筆談ができるのはありがたい。全くといっていいほど中国語ができない私だが、とりあえず漢字を並べれば伝わる。漢字を並べてくれれば伝わってくる。村長とのやりとりの仲介役をしてくれた、タバコの箱、私のメモ帳、カレンダーの裏はどれもぼろぼろだが私の宝物だ。「危房勿近」と壁に書かれた村長の家で、潮州式のお茶をいただきながらの筆談の時間を思い出す。





「小たいらん」と名づけられたちっこい犬を飼う郭さんは、村一番の働き者であり、アーティストである。ある晩、彼にスケッチブックとペン、絵の具、筆ペンなどを渡すと、すごい勢いで絵を描き始めた。模様のような、でも何かを表現しているような、不思議な絵。郭ちゃんは、絵を描きながらゲップやおならをする。たいらんと太極

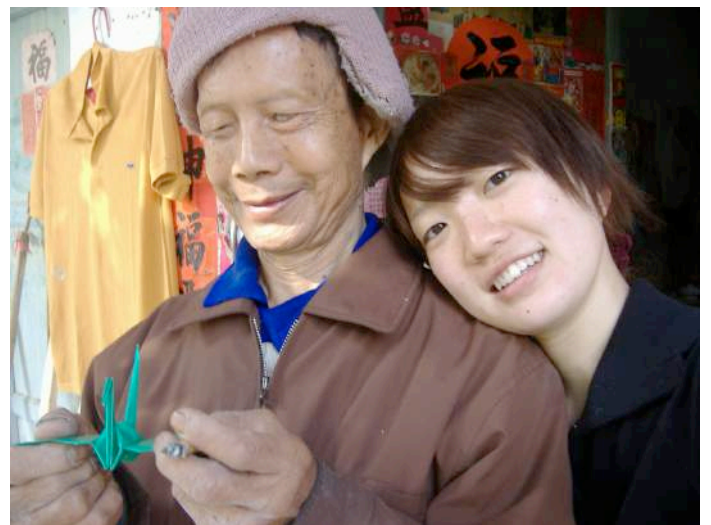
～ツナガリ～

い 今回、トゥーグアン、リンホウ、ピンシャン、ジャーピンと4つの村を訪ねた。いま、村が恋しい。ただ単にハンセン病快復村を訪れてワークキャンプをした、ではなく、あの村のあの人に会いたい、だから村が恋しい、そんな感情だ。この気持ちを私は大切にしたい。人と人が「ツナガリ」を持つということは、こういうことなのだろうと気づかせてもらったから。今年の夏は、ジャーピン村でキャンプをする。キャンプ後も、あの村人に会いたいと思えるようなツナガリをジャーピンでも築いていきたい。そしてなにより、私たちが訪れたことで人の流れが生まれ、リンホウのように人が自由に行き来する村になればいいと思う。第二、第三のリンホウが、これからどんどん増えていくことを切実に願っている。

拳をしてじゃれあう。今までのキャンパーの名前を、呪文のようにぼそぼそ唱える。。。郭ちゃんというフィルターを通して生まれてきたあの絵は、一体何を意味していたのだろう。絵を描きながらの不可解な言動も、いまだになぞだ。それらは郭ちゃん以外のだれにも分かりはしない。さすがアーティスト。


どっからそんな声が出るの？と問いたくなるような黄色い声で、いつも「ニーハオ」と言ってくれるジャクチンツェ。ハンセン病であったことをギャグにするチンクワンツェといると、ただただ楽しく、ハンセン病のことなど忘れてしまう。村で唯一の女性になってしまった蔡おばあちゃんは、両足裏に傷があり、おしりで歩く。指がなく、タバコを両手で挟んで吸う許おじいちゃんは、私が折った鶴をパタパタさせて無邪気な笑顔で喜んでくれた。友南おじいちゃんは、遊びに行くとあまり美味しくない飴で私をもてなしてくれる。チャリで元気に買い物に行くのは、若い孫おじいちゃん。社会復帰して村の外に住んでいる陸さんは、ハンセン病歴のない奥さんを持つという。

彼らは「麻風病人」（ハンセン病患者）ではない。ひとりひとりが、私を含め多くの人間を魅了してやまないリンホウの村人だ。それを物語るかのように、リンホウには様々な訪問者がひっきりなしにやってくる。人の流れがここにはある。これまでに9回もワークキャンプを行った成果だろう。単なるインフラ整備だけでなく、いつの間にか村に人の流れを創ってしまうワークキャンプは、リンホウと外界とを隔てていたあのトンネルを、もうすでに取り払ってしまったかのように思われる。トンネル前方に見える小さな光が、隔離からの出口であるように思えて仕方が無かった。



(文章：えり)

4. ピンシャン村再訪

<p>3月 7日 (火)</p>	<p>夕方五時ごろ広州に向け福岡より出航。</p> <p>↓約3hのフライト</p> <p>夜8時半ごろ China 着。広州空港。</p> <p>↓深夜バス 夜11:30～(約12h)</p>	
<p>3月 8日 (水)</p>	<p>午前11時ごろ桂林に着く。</p> <p>桂林医学院によったりして、バス3つほどに乗る。そして歩き1h。</p> <p>↓</p> <p>夕方6時ごろ平山村に着く。</p>	
<p>3月 9日 (木)</p>	<p>朝から村人に対する医療ケア</p> <p>四人（よっぴ、あおき、ぞぞ、えり）でケアグッズを片手に第一地区、第二地区を回る。カルテ作り</p> <p>途中でロンフォイが合流。</p> <p>村人の家でご馳走になる。</p>	
<p>3月10日 (金)</p>	<p>日もまだ昇らない早朝、村を出る。桂林医学院へ向かう。</p>	

3月8日(水)、去年の夏にワークキャンプを行った桂林のピンシャン村に再び訪れた。今回は村人との再会と、前回のキャンプの思い出アルバムを渡し、それから傷のケアの状態を知るという目的の、日本人4人でのプチキャンプ。約7ヶ月ぶりに、アポもなしで村に訪れた私たちを、村人は笑顔で、あくまでも普通～に家族か友人かが帰ってきたかのように迎えてくれた。バスを降りてから村までの雨でぬかるんだ山道を重たい荷物をかかえて迷ったり滑ったり転んだりしながら歩き、もういや、帰りたいと思っていた。その疲れは一気に吹き飛んでいってしまった。村のじいちゃん達がニコニコして名前を呼んでくれた、全て正しくはないとしても☆(笑)。『ゆきこ(前のキャンプのメンバーの名前)は?』と聞いてくれる。そして、『晩ごはんは?まだならうちで食べる!!』と着いた日から帰る日まで食事を作ってくれるおじいちゃんもいた。感動♪♪♪その日は村人たちの家にあいさつ(ホームビジット)をしてもらった。(文章:あおき)



3月9日（木）、夏の記憶を懐かしみながら、村人たちの家を訪問し、ケアを実践した。夏のケアの効果があったのか、怪我がだいぶよくなっている村人が多かった！ものすごくうれしい瞬間だった♪去年の夏は、目をそむけたくなるような傷だったのに、素人でさえも分かるほどよくなっていた。そして今度の訪問のときに役に立つように、カルテをつくり、村人たちとのコミュニケーションも楽しんだ♪夜には昨日の晩御飯を食べさせてくれた村人たちが「うちで食べるっ！」オーラを出していたので、いさぎよくごちそうになりました（笑）ここまで私達の世話を焼いてくれて、なんて優しい人たちなんだ、と思い、感動しました♪そして深夜、村人の二胡の演奏を聞かせてもらったあと、明日の早朝の出発にそなえ、眠りにつきました。（文章：ぞぞ）



3月10日（金）、次回キャンプ地、甲坪村に向かうため、朝早く起きてピンシヤン村を出る。前日、村人と夜遅くまで話していたため、朝起きるのが少々辛かった。数日間だったがお世話になった部屋を掃除し、ごみを焼いて、身支度。まだ外も暗い早朝だったため、村人にお別れの挨拶が満足に出来なかったことが残念だった。もう見慣れてしまったピンシヤン村を囲む雄大な自然を、またしばらく見られなくなるんだなと思うとなんだか寂しい気持ちでいっぱいだった。桂林医学院で学生と合流し、甲坪村へと向かう。（文章：えり）



5. 甲坪（ジャーピン）村下見

3月11～12日で南丹（ナンタン）にある甲坪村の調査にGO。前回の平山（ピンシャン）村とちがって快復者の家族や子供たちがたくさんいて活気にあふれていて・・・ちょっとびっくり。桂林のごつごつした岩山と違って、日本のようになだらかな山々に囲まれてのんびりと時間が流れている所。

《基本情報》

村名・創立	南丹甲坪村（創立1956年）
交通手段	広州～桂林（バス12h） 桂林～金城江（汽車6h） 金城江～八土干（バス1.5h） 八土干～甲坪村（車0.5h） ※帰りは同じ経路だが手段が多少異なる
気温	夏季25～32℃ 冬季-2～10℃
産業	農業（主に稲作）、豚・牛・鶏などの畜産業、養蚕 ※副業として織物や染め絵・刺繍など
村人	・ハンセン病患者 7人（男3：女4） ※うち2人は傷が深刻で他者によるケアが必要。残り5人は自身である程度ケアが可能。 ・ハンセン病快復者 11人（男4：女7） ・患者や快復者の家族や親戚 27人（うち15歳以下の子ども16人） ――以上計45人――
状況	3分の1ほどの家がコンクリート造りで新しく建て直されており、それぞれの部屋にベッドも設置。トイレ3つと水道4つも共同用に新しい家の前に設置されている。すべて最近設置された様子。これらに関わった支援団体は今のところ不明。 残りの3分の2の家は古いままでトイレ・水道ともに無し。共同用を利用している。

《甲坪村の problem》

- ・偏見（周辺の農村で根強い）
- ・医療ケアの向上（政府による薬の普及など十分でない）
- ・水道の不足（共同用に3本のみ）
- ・子どもについて（教育、不潔、出稼ぎ、避妊問題など）
- ・特産品（養蚕、織物などの発展）
- ・牛舎や家畜小屋の改築
- ・共同体としての団結不足

以上の問題点が挙げられ、ミーティングの結果2006年夏に甲坪村でキャンプを行うことが正式に決定!!!



《次回キャンプの展望》

- ・中国、日本、ドイツの3ヶ国合同でワークキャンプを行う。
- ・各国の連絡係を軸に連絡を取り合い具体的なワーク計画を進める。
- ・新しい家や水道などを作った団体に連絡をとり今後の展望など確認しあう。
- ・医療ケアの計画（カルテ準備、薬の手配など）

（文章：よっぴ）

6. 会計報告

	収入	支出	残り
村費回収	$200 \times 4 = 800$		800.0
広州-桂林バス		$150 \times 4 = 600.0$	200.0
桂林医学院にて買い物		22.5	177.5
桂林市街-潮田バス		$4 \times 4 = 16.0$	161.5
潮田にて買い物		17.0	144.5
潮田-平山医院バス		$4 \times 4 = 16.0$	128.5
平山医院前にて買い物		20.9	107.6
平山医院-桂林市街		$10 \times 4 = 40.0$	67.6
桂林市内バス		$1.5 \times 4 = 6.0$	61.6
金城江にて買い物、朝食等		24.8	36.8
金城江-八杆		34.0	2.8

(単位：元) 1元 ≒ 15円